

不安と混乱の中での“小さな自治”





上:原発事故を報じる新聞に見入る女性(田村市提供) 下:食事の提供時間で混雑する避難所

上:協力して支援物資を運び入れる避難所の人たち(田村市提供) 下:避難所の住民を対象に行われたスクリーニング(田村市提供)

不安と混乱の中での“小さな自治”

【クローズアップ大熊町③】

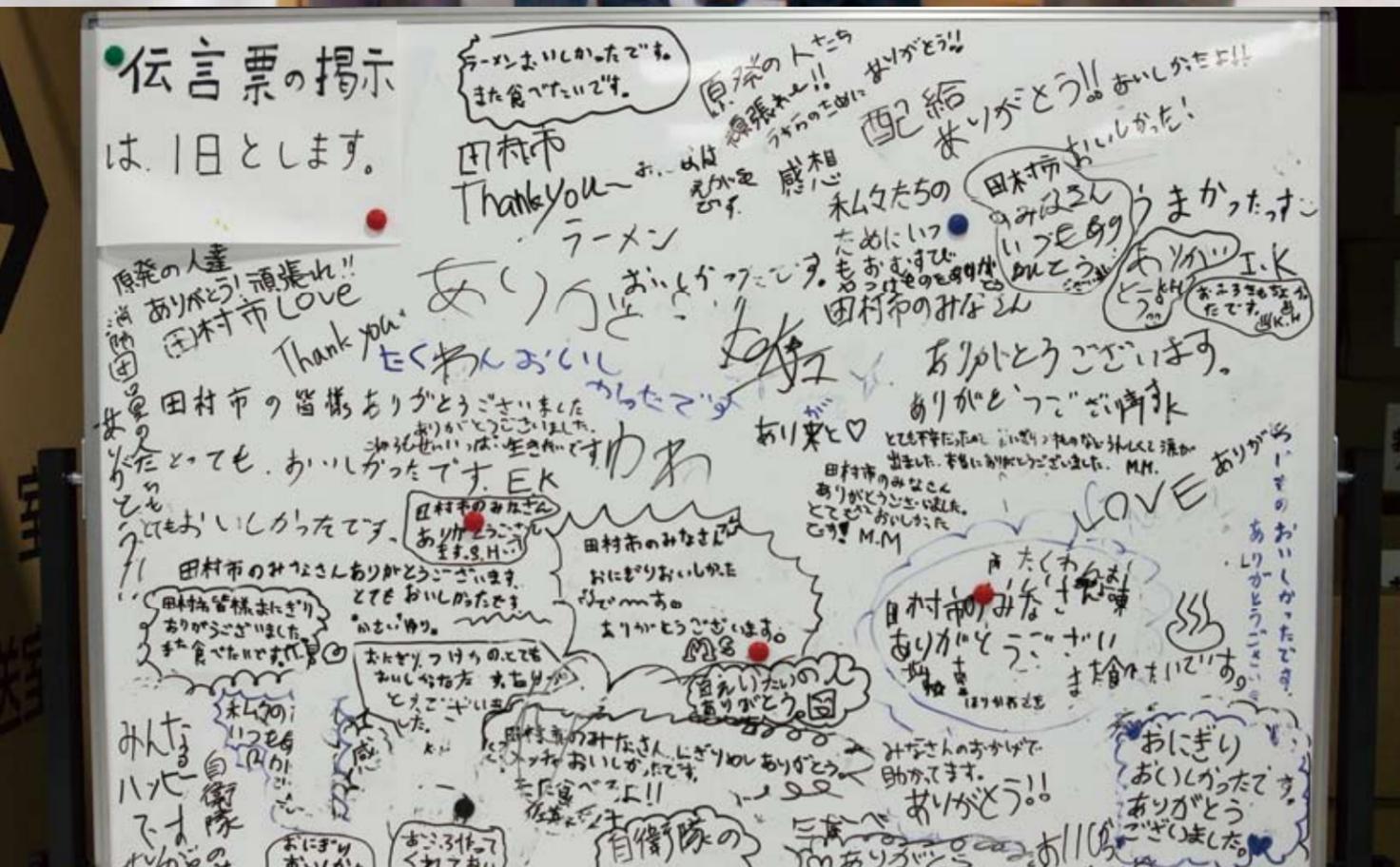
平成23年3月12日早朝の避難指示で大熊町を離れたとき、職員も含め町民の多くは東京電力福島第一原子力発電所の状況も分からず、「ほんの2、3日のつもり」で着の身着のままバスに乗り込んだ。避難先にあったテレビで初めて、12日の1号機水素爆発を知ったという人も多い。そして福島第一原発の状況は、14日午前11時1分の3号機水素爆発、15日午前6時14分ごろの4号機水素爆発と悪化の一途をたどる。「ああ…」。職員は避難所でテレビに釘付けになっていた町民の口から、言葉にならない思いがこぼれるのを聞いた。

町民の避難先は町が把握するだけでも田村市、三春町、小野町、郡山市の避難所二十数か所に及んでいた。町は田村市総合体育館に災害対策本部を置いて田村市と連携するとともに、三春町、小野町、郡山市の動きに対応する連絡員を設置。他の職員も各避難所に再配置して避難所運営に乗り出した。しかし、4市町に主な避難先が分散し、公用車、ガソリン不足が続く状況で、町災対本部と各避難所の迅速な情報共有は難しかった。各避難先自治体・施設管理者の支援のあり方や避難者の数、配置された職員数など避難所ごとに事情は異なり、避難所運営のあり方は実質的に現場にゆだねられた。

小さい避難所で数十人、大きい所で1,000人を超える避難者に、職員だけで目を配るには限界があった。ある職員にとって最も気がかりだったのは、持病の薬も持ち出していない人が多い中での体調管理。避難する町民の中に医療関係者を見つけ、「目の届く範囲でいいから、異変に気づいたら教えてね。助けてね」と声をかけた。避難所によっては、町の消防団員が職員に代わり夜間の避難者対応や受付を担い、地域の住民は「乳幼児だけでも」と自宅の風呂を開放したり、野菜や米など食材を提供したりしてくれた。食材は避難先施設にあった調理室を使うなどして、町民が主体となって温かい食事を作った。施設内の見回り、ゴミの片付け、掃除……。「避難者同士が協力し合い、小さな自治のようでした」と話す職員は、手が回らなかったポットのお湯を、知らない間に替えてくれていた町民に今も感謝している。ままならない避難生活の中で小さな気遣いが避難所の運営を助けた。

町を出たとき、またすぐに会えると思っていた人たちは生きているのか、どこに避難しているのか。さらに、いつまで自分たちは避難所にいられるのか、町はこれからどうなるのか。それぞれに避難生活を送りながら、町民の不安や混乱は大きかった。しかしその時点では、職員にも、東京電力や国の情報に接する災害対策本部にも先は見通せなかった。町民の一人が綴った当時の日記には、親戚や知人の安否を気遣う言葉が並ぶ。そして無事が判明すれば、願った。

「また、会えますように」



上:避難所で行われた小学6年生卒業の集い 下:支援への感謝が多数書かれた避難所の伝言板